『多元的共生社会が未来を開く』補論
――モリスの「社会主義」を考える――

An Essay Supplementary to My Book:
Considering Morris's 'Socialism'

尾関 周二
Shuji, OZEKI

はじめに

『多元的共生社会が未来を開く』を執筆した後に、書き足りなかったことが幾つかあることに気づいたが、ここではウィリアム・モリスに関係する論点を中心に簡単に述べてみたいと思う。

私は環境哲学を始めとする環境思想の研究を通じて現代社会における〈農〉の問題の重要性を認識するとともに、共生理念をそれに結びつけて、新たなエコロジカルな将来社会の展望を切り開く社会構想として、〈農〉を基軸にした多元的共生社会を提起した。それは共生持続可能社会、農工共生社会、農村都市共生社会、多文化共生社会などの多面的な様相をもつものであった。

この社会構想は脱近代、脱資本主義を主張するものであったが、これは社会主義やマルクス主義の思想とは無縁なように思った方も少なくないであろう。特に、いわゆるソ連型社会主義を典型的な社会主義としてイメージしている場合にはそう思われるかもしれない。しかし、じつはウィリアム・モリスの「社会主義」には意外に近いところがあるのである。

ここでは、こういった「社会主義」とかかわって、補論的にウィリアム・モリスの「社会主義」の考察をするとともに、それと私の構想との関わりに一言ふれてみたいと思う。

(1)

ウィリアム・モリスは、現在の日本では、一般には「アーツ＆クラフト運動」の指導的芸術家、そしてまた工芸家、装飾デザイナーとして有名で彼の魅力的な壁紙や装飾品等の作品は多くの日本人に愛好されている。しかし、戦前はむしろ社会主義者として有名で、「日本マルクス主義の源流」の一人とされる堺利彦などによって、今日『ユートピアだより』と訳されている彼の主著が『理想郷』(1904) というタイトルで翻訳出版された。また、モリスとバックスの共著『社会主義』の中の『資本論』の解説部分が翻訳紹介されたりした。ところが、戦後は、日本ではウィリアム・モリスは、「アーツ＆クラフト運動」の先駆者としてのデザイナー・芸術家としての面がもっぱら注目されて、彼が社会主義者であった面は長い間ほとんど関心がもたれなかったといえよう[1]。しかし、ソ連型社会主義の崩壊もあって、モリスのこの面にも最近は関心がもたれるようになってきているといえる。

特に印象的なのは、マルクス経済学者の大内秀明によるモリス理解である。彼の『ウィリアム・モリスのマルクス主義』(2012) によれば、マルクスの思想からはエンゲルス、レーニンのいわゆるマルクス・レーニン主義や社会民主主義の系譜だけでなく、ウィリアム・モリスのような共同体を重視するマルクス派の社会主義の流れもあるとしてそれを「共同体社会主義」と呼んでいる。大内によれば、モリスの場合は、「唯物史観」にとらわれることなく、『資本論』のフランス語版の研究から出発してマルクス思想を彼自身の「アーツ＆クラフト運動」の思想と結びつけて「共同体社会主義」をつくりあげたとして高く評価するのである。

ちなみに、大内は、モリスは戦前宮沢賢治や芥川龍之介にもこういった影響を与えていたということで、興味深い事実を交えて次のように述べている。

「若い農民たちと、羅須地人協会で、モリスの労働観を語り、マルクスやエンゲルス、社会主義をしばしば話題にしていた宮沢賢治も、『私は小ブルジョア』と語り、『革命という手段は好きでない』と言って、ロシア革命には批判的な立場を述べていたようです。芥川龍之介は、東京大学の卒業論文のテーマに『若きモリス』を選びましたが、賢治は彼とも共通したモリスの〈共同体社会主義〉の思想を、ひそかに抱いていたかもしれません。」(大内 2012：228)

このように、モリスはいわゆる「社会主義者」とされる範囲を大きく超えて影響を与えてきたが、しかし、逆に、エンゲルスがある手紙[2]のなかでモリスを「根深くもセンチメンタルな社会主義者」と呼んだこともあって（ヘンダーソン 1990：562)、社会主義者の主流のなかでは、その評価はいまひとつであったわけであるが、ここではそれらの意味を考えることにもつなが

るであろう。

⑵

さて、確かによく知られているように、ウィリアム・モリスの『ユートピアだより』（1890 雑誌執筆、1891 単行本発刊）は、当時から 200 年後のロンドン近郊のテムズ川沿いの田園の中での人と自然、人と人の様々な関わりを通じてモリスの社会主義のイメージを語ったものであるが、それはエドワード・ベラミ（1850－1898）のユートピア小説『かえりみれば――2000 年より 1887 年』（1888）を批判する意図でもって書かれたということを考えると興味深い。さきの大内もまた、ベラミの『かえりみれば』は未来の社会主義の社会を、〈国家社会主義〉のイメージでとらえているとし、それにモリスは反発して『ユートピアだより』を書いたとしている[3]。

米国のジャーナリスト兼ロマンス作家のベラミによって 1888 年に著されたこの本は、当時ストー夫人の『アンクル・トムの小屋』と並ぶ超ベストセラーとなり、各国語に翻訳されただけでなく、社会的影響も大きく各地にベラミ協会などもつくられたとされる。この本は、一種のユートピア小説で、1880 年代の米国の急速な経済発展とそのもとでの貧富の格差の拡大の状況下で、ボストンの貧困や悲惨や不正に無感覚な上流階級の主人公の青年が不眠症に悩まされ、自宅の地下室で催眠術によって眠りにつくが眼を覚ますとそこは紀元 2000 年のボストンであったという設定である。そこでは、高度に科学技術が発達して、すべて産業と労働は国家によって一元的に管理・統制され、1880 年代の深刻な不況や不平等などの社会的問題が解決された未来の理想社会であった。これは当時社会主義の流れのものと受け止められ[4]、たとえば、日本でも 1904 年に堺利彦によって『百年後の新社会』というタイトルで翻訳され平民社から発刊されたが、日本政府によって社会主義文献として発禁処分にされている。モリスの『ユートピアだより』はこういった『かえりみれば』のユートピア社会を批判するオールタナティヴの社会主義的ユートビアの提示だったといえる。

さて、なぜモリスは『かえりみれば』に反発したのか。あらかじめ、誤解を恐れずに単純化していえば、まずは米国人ベラミの未来社会があまりにも国家主義的で工業主義的なイメージであったからといえよう。モリスが社会主義者として活動した当時の 19 世紀末のイギリス、1880 年代は『イギリス労働運動と社会主義』の著者の安川悦子が言うように「転換」の時代の始まりで、イギリス社会の政治・経済の構造矛盾が深まり「社会主義の復活」の時代であった。そして、様々な社会主義、共産主義、アナーキズムの諸潮流の乱立と混沌があったといえる。

今日からみると、ベラミの『かえりみれば』で語られた未来社会では、確かに資本家や働くことのない資産家などはおらず、すべての人々が平等に国家によって産業隊に組織されて人生の一定期間を働くのであり、いわば「国家社会主義」と呼べるようなあり方である。社会主義のこういったイメージに対して、マルクスのフランス語版の『資本論』を読み、マルクスに共感するとともに、クロポトキンとも交友をもっていたウィリアム・モリスがこういった国家の統制を強調するユートピアに反発して、オールタナティヴのユートピアとしての社会主義社会を書こうとしたのは理解できることである。確かにモリスは暴力的なアナーキズムとは無縁であったが、非暴力的なアナーキストであったクロポトキンの未来社会とは共通する面があったといえる。ただ、モリス研究者の小野二郎も指摘するように、国家をひとびとが不必要になるような生活世界をつくりだすまでは、その役割を認めたという点でクロポトキンとの違いがあることは重要であろう（小野 1992：212）。

⑶

このように社会主義をめぐるベラミとモリスのユートピアの違いは、国家の強調かどうか、という点と、もう一つは都市か農村のどちらが物語の場面かということにあるようにみえよう。ベラミのユートピアでは、ボストンがその物語の場になっているように都市社会のイメージが中心であるのに対して、『ユートピアだより』では、当時から 200 年後の牧歌的なテムズ川沿いの村々が物語の場であるように、モリスは社会主義のイメージを田園生活と重ねるのである。このようにユートピア社会を都市生活でなく、田園生活にみるということはどういう意味をもっているのであろうか。

さきにふれた『かえりみれば』の邦訳書における本間長世の「解説」によれば、ベラミのユートピア小説に反応して多くのユートピア小説が書かれたが、そのなかの一つとしてモリスの『ユートピアだより』もあるといって、ユートピア研究で有名なルイス・マンフォードの言葉に言及して次のように述べる。

「モリスの理想郷は田園であるが、ユートピア研究家のルイス・マンフォードは、プラトンの『共和国』からベラミの『かえりみれば』に至るまで、理想社会は都市という形で描かれてきたことに注目し、ユートピアという概念は古代ギリシア人が頭のなかで描いた

幻想だったのではなく、歴史的事件に由来したものだったのであり、最初のユートピアとはすなわち都市それ自体だったのだと論じている。」（本間 1976：6）としている[5]。

さきの小野二郎も次のように述べている。

「ユートピア文学というものは理想の社会の建設の計画案、その社会秩序、組織を説得的に描写しなければならない。だからそこでは自然にたいする人間の完全な支配欲望を前提として智慧にあふれた法律に拘束された輝ける都市の構想が基本となる。たとえば、トマス・モアの『ユートピア』では、自然の支配の手段としての労働が重要視されるが、それを支えるものは、やはり理性と禁欲主義である。」（小野 1992：202）

つまり、モリスが理想社会を都市でなく、田園でもって描いていることは、（アルカディアや桃源郷などの牧歌的言葉は古くからあったにせよ、）ユートピア物語の系譜のなかでは、かなり特異といってもよいのである[6]。そしてまた、このことは、国家の問題と関係しているのである。小野が、モリスが編集長を務めた社会主義同盟の機関紙『コモンウィール』（1889 年 6 月）の中に書いたモリスの言葉を引きながらこのことを明らかにしている。

「ベラミは社会主義者であるとしても、階級社会の不正、悲惨、浪費さえなくなるなら近代生活に完全に満足している。だからその理想社会は『近代生活の最良の部分』の延長としてしか考えない。ベラミの生活の組織化の計画は『国家へのきわめて徹底した中央集権化によって動かされている国家共産主義』といわるべきものだ。『要するに、ベラミ氏が、すべての面でわれわれにとって最上のものと想像できるのは、他ならぬ機械生活そのものなのである。』『未来の理想は、労働を最低限にまで軽減することによって人間のエネルギー支出を減少させることではなくて、むしろ労働の苦痛の最低限までの軽減――ほとんど苦痛でなくなるほどまでの――をめざしていると私は信ずる。』」（小野 1992：204）

「労働は喜びである」という信念をもつモリスは、労働の苦痛を軽減するために機械を利用することには賛成であるが、とにかく新たな機械によってどんどん労働をなくしていくという考えには反対なのである。工芸品や農産物をつくる労働のように、人間の身体を使う労働は機械化・部分化されない限り本来人間に喜びを与えるというのがモリスの考えである[7]。

(4)

モリスが『ユートピアだより』においてベラミのように国家や社会の制度・組織について全くふれていないことに不満をいだかれるかもしれないが、こういった制度よりも人間のあり方についての転換への関心がモリスのユートピア的な新社会にあると述べるのは、31 歳の若さでなくなったマリー・ルイーズ・ベルネリの『ユートピアの思想史』（原題、『ユートピア巡り』、1950 年）の中の言葉である。

「（モリスの）新社会にあっては制度ばかりでなく人間の全体像が変わってくるということになる。『人間性』は社会の性格に依存するところが大である。『貧民の、奴隷の、奴隷所有者の人間性』があり、そして『裕福な自由人の人間性』がある。それだからこそ、モリスはかれの自由社会に、もはや奴隷精神をもっていない人びとを住まわせるのであり、新社会の全組織機構を詳細にしめそうとすることよりも、そこの人びとがどんなふうに行動するのかを示そうとする。このことはモリスが、育児から都市計画、家事から工業生産に至るあらゆることにかんして、自己を託宣者と考えた多くのユートピア著作者たちとは違って、自分の知らない問題については自分の意見をのべるのをさしひかえるという態度からきたことであろう。」（ベルネリ 1979：420）

このベルネリに関わって小野二郎は大変興味深いことを述べている。おそらくこれは『ユートピアだより』が提示する魅力の核心にかかわることであろう。

「提示されているのは新しい感受性なのである。生活の質についての感受性、生活の質感。この生活の質感は生活を支配するすべての構造に批判的に働く。否定性として働く。モリスが 19 世紀のほとんどのユートピア作家たちと違って『産業革命がひきおこした悲惨からだけでなく、産業発展という信仰からも脱け』だした世界を描いたことは、その世界の官能的な平安とは逆に鋭い否定の機能を果たすだろう。」（小野 1992：208）

「産業発展という信仰」とは、今日的表現でいえば、「成長への信仰」と言い換えてよいであろう、モリスの感受性には脱産業社会、脱工業化社会という「感受

性」があったといえるのである。さらに小野はベルネリがユートピアを二つの傾向にわけたことにふれる。

「『一つは、物質的福祉、集団への個人の埋没、国家の偉大さなどを通じて人類の幸福を追求する方向であり、いま一つは、ある程度の物質的充足を要求しながらも、幸福とは人間の個性の自由な発言の結果なのであり、恣意的モラルや国家の利益の犠牲にされてはならないと考える。』

彼女はその『ユートピア巡り』（邦訳名は上記の『ユートピアの思想史』――引用者」）において、『権威主義的ユートピア』というカテゴリーに入らないユートピアは、ディドロとフォアニイと並んでモリスを数えれば他にほとんどないと考えているようだ。ザミャーチン（『われら』）やオーウェルは権威主義的ユートピア否定の精神によって生まれたものであるが、非権威主義的ユートピアを描くまでにいたっていない。」（小野 1992：210－211）

小野は、非権威主義的ユートピアは非常に少ないというベルネリの言葉に注目するが、このことは、モリス後のマルクス思想の分岐とその一つがスターリンの全体主義的な国家社会主義へと行きついたことを考えると示唆的であることが理解されよう。

こういったベルネリの評価は『ウィリアム・モリスの全仕事』という大部の著書を著したポール・トムスンの以下の評価とも響き合うところがあろう。トムスンは、「ウィリアム・モリスは、今も社会主義の偉大な独創的な思想家の一人である」としながら、それは彼の思想の構成要素の点でなく、この点ではラスキンやマルクスに先例があるからであって、独創的なのは彼のこれらを独自にまとめあげた「ビジョンの総体」であるとして次のように述べている。

「マルクスの体系的な歴史分析とロマン主義の伝統とラスキンとを融合させ、さらに道徳価値を全面的に把握して、新しい道徳性と新しい社会の未来へ創造的に飛躍したことなどすべてがユニークなのである。」（トムスン 1994：364 頁）

モリスへの思い入れが少し強すぎる評価のようにも思えるが、こういった視点からの理解もあることは知っておいてもよいであろう。

⑸

ところで、モリスは『ユートピアだより』のようなユートピア小説やエッセイだけでなく、また、彼より若いE・B・バックス[8]と一緒に『社会主義 その成長と帰結』[9]という理論的な著作も出したことは忘れてはならないであろう。この本の「第十九章 科学的〈社会主義〉――カール・マルクス」に続いて、最後の二章「第二十章　たたかう〈社会主義〉」、「第二十一章　勝ち取られた〈社会主義〉」においてモリスの社会主義のイメージが語られている。

この本の詳しい検討はまた別の機会にしたいが、これまで述べてきた関係で若干のポイントを指摘しておきたい。モリスの「国家社会主義」に批判的で「共同体社会主義」と呼べるような彼の考えはこの『社会主義 その成長と帰結』という本の中の以下のような文言からも窺えるので、少し長いが引用しておこう。

「ここで述べておくべきことだが、〈社会主義者〉たちのあいだで近代官僚国家を扱う方法について、二つの見方が流布している。といっても、両者が根本的に相容れないというわけではなく、別々の観点から事態を見ている結果なのである。ある人々にとっては、国家＝政治組織は非常に攻撃しがたく、過渡期にある種の社会をまとめあげておく目的には明らかに役立つように思えるため、新社会が古い官僚国家という政治の外殻のもとで発展してゆくことを期待している。新しい社会体制を実現する前に、革命家たちの妨げになるどころか、そうした官僚制がある程度利用可能だとみているわけだ。

他の人々も、いま述べた見解については私たちと同意見であり、国の体制はいまのところはその基本的な要素に関しては直接攻撃してもうまくいかないが、ひとつは連邦及び国際的なもの、もうひとつは地域的なものという、二つの原則によるたえざる行動によって兵糧攻めにして滅ぼせるし、そうするべきだという考えである。つまり現在の中央政府の権限が地方自治体に漸次以上されていって、やがて政治国家が弱体化して地方組織と産業組織にかえられるようになるべきであろう。」（モリス 2014:208 頁）

ここにもさきに述べたようにモリスの未来社会のイメージはベラミの国家重視と違ってクロポトキンとそれほど違いがないが、それに至る過渡的段階で国家の存在を認めつつも漸次消滅するものと考える点での違いがあることが理解されよう。

ここで、モリスが晩年になってなぜ『資本論』に強い関心をいだくことになったのか、疑問をもたれるかもしれない。それで、それについて当時のモリスの問

題意識と取り巻く人間関係を興味深く要約的に述べている安川悦子の『イギリス労働運動と社会主義』のなかの言葉を引用しておこう。

「若きモリスの思想形成になによりも大きな影響をあたえたのは、イギリス・ロマン主義のもつ芸術観であった。かつて、ドイツからロンドンに渡ったばかりの若いエンゲルスに非常な衝撃をあたえたカーライルが、ほぼその 10 年あとでオクスフォードに入学したばかりのモリスの心をとらえたのである。カーライルの『過去と現在』(1843 年)に描かれる非人格的人間関係＝「拝金主義」の社会に、エンゲルスもモリスも衝撃をうけたのである。カーライルとその後継者ラスキンは、モリスが芸術と社会についての理論、労働の人間形成においてもつ意味などをくみだした貴重な思想の泉であった。カーライルがエンゲルスをとおしてマルクスにあたえた衝撃は、マルクスに古典経済学を裏返しによみとる目であった。それは『経済学・哲学手稿』(1844 年)での賃労働の疎外認識となって結実することになる。モリスは、カーライルから現金関係の支配する非人間的『文明社会』への憎しみと、芸術＝『労働の喜び』という二つの視点を勝ち取るのである。モリスが『資本論(第一巻)』をよんだのはじつはこの二つの視点からであった。この二つの眼が、『資本論』というるつぼをとおしてでてくるとき、現金関係の支配する現代文明への憎しみは、階級対立と競争の支配する資本主義生産そのものへの憎しみになり、労働の喜びは、新しい共産社会への構想となってあらわれる。」(安川 1993：248－249)

ここには、当時もっとも経済的・軍事的に力をもった大英帝国のもとで、成熟した産業社会・文化の矛盾へのラスキンやカーライルによる批判的対抗の影響を受けつつ、ヘーゲルなどの異なるドイツ哲学の系譜をもつマルクスの思想潮流を背景にする『資本論』を通じてマルクス思想の根幹にふれたところにウィリアム・モリスのユニークな思想が生まれたことが窺えるであろう。ただ、おそらくラスキンの『この最後の者にも――ポリティカル・エコノミーの基本原理にかんする四論文』におけるリカードやジョン・スチュアート・ミルなどの「政治経済学(political economy)」への鋭い批判の影響を受け、ラスキンを人生の師としていたモリスにとって、その副題に「政治経済学批判」をもつマルクス『資本論』は、ラスキンの仕事を一層徹底して行ったものという受け止め方もできたかもしれない[10]。実際、マルクスの『資本論』はモリスの見方によれば、ラスキンが『この最後の者にも』で行った政治経済学批判を学問的に深く精緻な仕方で行っているというように理解したとしてもそれほど不思議はないであろう。

ここにさきに述べたエンゲルスのモリス評価「根深くもセンチメンタルな社会主義者」というなにげない言葉のなかに、ヘンダーソン『ウィリアム・モリス伝』の「解説」で川端康雄が言っているように、エンゲルスとモリスの異なる革命思想の伝統の現れが出ていると理解されねばならないかもしれない。川端は『ウィリアム・モリス――ロマン派から革命家へ』を書いたＥ・Ｐ・トムソンにふれて次のように述べる。

「モリスの方はマルクスの学習を通してエンゲルスが属する伝統の多くを理解し吸収せんと努め、かなりの程度までそれをやりおおせたのだけれども、逆にエンゲルスは、同じようにモリスの属する伝統を理解しようとはしなかった。マルクス主義の本流にモリスの思想を取り込むことによって、コミュニズムのエトスの内容がはかりしれず豊かにされていたかもしれないのに。これが後年の社会主義運動の展開を決定的に貧しくしたのではなかったかとトムソンは示唆しているのである。」(ヘンダーソン 1990：586)

こういったことはさらに大きくいえば、やはり同じマルクス思想の流れといっても、社会主義とともに後進ロシアの近代化を同時に目指したレーニンと先進イギリス資本主義の成熟において脱近代としての社会主義を目指したモリスの流れの違いにも増幅してかかわってこよう。

(6)

ところで、ベラミと違って田園生活をユートピアの中心に描いたモリスのこのいわば「田園社会主義」は、当時の多くの労働運動家、社会運動家などの重要な関心であった農村と都市の関係の問題についての共有が背景にあるといえよう。もともと、イギリスでの社会改革者の草分けで「協同組合運動の父」と言われるロバート・オーエンのニューラナークの協同村建設の背景にある問題意識にもつらなっていたと思われる。またすでにふれたモリスの同時代のアナーキストのクロポトキンも同じ 1898 年に『田園、都市、仕事場』というタイトルの本をロンドンで出版しているが、周知のように、ここにも農村と都市の関係の問題意識がある

のである。

農村と都市の関係の問題意識は、拙著『多元的共生社会が未来を開く』でもふれたように、18 世紀後半以降の工業化・都市化のなかで、農村から追い出された貧農らの流入もあり、ロンドンなどの大都市が無秩序に拡大し、スラム化や環境悪化を引き起こすことによって多くの知識人の間に生まれた。そういった背景のもとに、E・ハワードらは都市問題を解決するために、都市を自然や農業と結合させることによって人間的なものしようと、「農村と都市の結婚」、「農業と工業の結婚」といった言葉とともに、「田園都市論」を構想し具体的に提起した。この構想は、ハワードの後継者のアンウィンによって、実際にロンドン郊外のレッチワースなどにその実現をみたが、これはまたドイツの田園都市運動に大きな影響を与えていくことになった。

さて、上記でわかるように、留意すべきは、モリスの「田園社会主義」は、都市一般を否定するものではないことである。その意味では、拙著で述べた「農村都市共生社会」に近いものといえよう。このことは、ロシア革命成功直後の 1919 年に書かれたアレクサンドル・チャヤーノフ[11]の『農民ユートピア国旅行記』とモリスの『ユートピアだより』の大きな違いでもある。チャヤーノフの「農民ユートピア国」では「都市廃絶法」が施行され、都市の解体が実施されていくからである。

『農民ユートピア国旅行記』は『かえりみれば』によく似ていて主人公のクレムニョフが目覚めてみると 60 年の時を超えて 1984 年のロシア農民共和国の首都モスクワにいると想定されて、アメリカ人旅行者チャーリーと偽ってこの国を旅行するという話である。この国は、ソヴィエト革命の後に起こった 1930 年の農民革命によって生まれた国であり、この国の農民政府は、「都市廃絶法」によって都市をなくしたのである。

「1984 年」と聞いて直ちにジョージ・オーウェルの反ユートピア、ディストピアの『1984 年』（1949 年）を思い起こすであろうが、じつはこの「1984 年」という年は『農民ユートピア国旅行記』訳者の和田春樹の「解説」によれば、次のような事情がある。

> 「そもそも 1984 年とは、ジャック・ロンドンの『鉄のかかと』のなかで 50 万人の強制労働で、52 年の歳月をかけてつくられた「驚異の都市アスガード」が完成された年として挙げられた年である。このことをチャヤーノフもオーウェルも知っていたに違いない。」（和田 2013：174）

興味深いのは、ジョージ・オーウェルの「1984 年」は文字通り逆ユートピア、ディストピアの世界であるが、チャヤーノフの「1984 年」はユートピアの世界であるのである。しかし、和田が言うように『農民ユートピア国旅行記』はユートピアを描きながら、それを主人公（著者）が批判する場面も出てくるという複雑さをもつのである。和田は次のように言う。

> 「ユートピアの叙述がそのユートピアに対する本質的な批判を含みつつ進められているところに、チャヤーノフの思想の深さがある。」（和田 2013：182）

実際この「農民ユートピア国」では、「才能ある生命を選別する」という優生学的な政策を知ってショックを受けた主人公は「こんな暴政にまさる暴政はありません！」と叫ぶ。また、この国は科学技術の発展によって天候・気象を自由自在に操作する「メテォロフォール・システム」という磁力線の磁場に関わる機械を作り出していて、ドイツ軍の侵略に対しては、これで対抗し、一挙にドイツ全軍を壊滅するのである（今日のわれわれには原爆を連想させる）。

従って、チャヤーノフのユートピア小説は「1984 年」という符号でオーウェルの『1984 年』というディストピア小説へとつながるのである。従って、ある意味で、チャヤーノフ自身は農民ユートピア国の中のディストピアの側面を見つめつつそれをさらに超えるユートピアを革命の動乱の中で構想しようとしたとも考えられる。しかし、同時にまた、ロシアの工業化を基礎に強まる農業のスターリン的な全面的集団化への迎合的な動揺とも理解される複雑な面ももつのである。このユートピア小説はまさに工業化と全工業の国有化を目指し、農村の余剰生産物を強制的に都市に没収する「戦時共産主義」のなかで書かれたことを忘れてはならないであろう。小農経営を農業の基本と考え、農民の協同組合を重視しつつも戦時共産主義に協力せざるをえないチャヤーノフの複雑な立場を反映しているともいえよう。

従って、チャヤーノフの「農民ユートピア国」はモリスの「田園社会主義」と触れ合うところをもちつつも、その違いも大きいように思われる。それはすでに述べたようにやはりモリおスがラスキンなどの近代産業社会による自然と人間精神の破壊という現代の環境・エコロジー問題につらなる脱近代的な問題意識を継承しているからである。

哲学者の伊藤邦武は、『経済学の哲学――19 世紀経済思想とラスキン』において、ラスキンの『この最後

の者にも』などにおける「政治経済学批判」の背景にあるエコロジー的な問題意識を明らかにしつつ、ラスキンの労働・経済論について、エコロジー的視点からの現代的意義について興味深い議論を展開している（伊藤 2011）。伊藤は、現代のラディカルなエコロジー思想であるディープ・エコロジーによる近代批判に賛成しつつも、その不十分さにふれ、ラスキンの政治経済学批判にある思想を考慮するとき、ディープ・エコロジーを乗り越えるような環境思想を生み出すことができるのではないかとしている。これは私も共感するところで、まさにこういった視点を通じて『多元的共生社会が未来を開く』で構想した脱近代文明がモリスの構想とつながると思うのである[12]。

ラスキンがリカードなどの政治経済学を批判しつつ、労働の喜びと自然へのエコロジー的・芸術的感覚を背景に語る次の言葉は、まさにモリスにとって『ユートピアだより』の「感受性」による物語を用意したものと思われる。

> 「どんな景色も、常時飽くことなく愛でられるものではないが、喜びに満ちた人間の労働によって豊かにされる。田畑はなだらかに、庭園は美しく、果樹は実り、清楚な心あたたまる家屋敷の点在、生きものの声があざやかに響き渡るのである。音のしない大気に快いものはない。それが快いのは、小鳥の高声、昆虫のうなり声や鳴き声、人間の太い調子のことば、子どもの気ままな甲高い声など――低い流れに満ちているときだけである。生活の術が学ばれるにつれて、あらゆる美しいものもまた必要であることが、ついには理解されるであろう。路傍の野草の花も、栽培された穀物と同様、野鳥も森の獣も、飼いならした家畜と同じように必要である。」（ラスキン 2008：169－170）

おそらくラスキンが現代において蘇ったら、上記の言葉に加えて、〈農〉の多面的価値（機能）を語ったことであろう。いずれにせよ、モリスの「生活の芸術化」にもとづく田園ユートピアと、チャヤーノフによるソ連型社会主義の工業的近代化の強行による農村破壊への批判的意識から発した科学技術の高度化にもとづく「農民ユートピア国」との違いなのではなかろうかと思うのである。

(7)

それでは、最後にモリスの田園社会主義の構想と私の多元的共生社会の構想との関係に一言ふれておこう。

最近の環境・エコロジー問題の解決を目指すなかで、自給的共同体や地域コミュニティの重要性が認識されてきたが、これを主張する論者の場合、ローカリズムは強調するが、ナショナルのレベル（国民国家）やグローバルなレベル（国際的諸機関の改革やグローバルな社会運動）での対応の重要性の認識が弱いことが多いように思われる。こういったことを念頭に、拙著『多元的共生社会が未来を開く』では、環境福祉国家や国際諸機関の民主的再構築の課題の重要性にふれておいた。環境福祉国家の構築とこの国家の連合による国際連合（国際諸機関）の民主的再構築が脱近代へ向かうために不可欠と思われるからである。

すでに述べてきたように、私の構想を簡単に述べれば、脱近代志向を前提に農工共生の地産地消的コミュニティの世界的なネットワークといったイメージである。こういった地域コミュニティに関してはすでに述べたようにモリスの時代にも試みられたが、こういった地域コミュニティが世界的なネットワークを作り上げる構想は、モリスの時代にはやはり現実的な可能性は低かったし、その必要性も強く感じられなかったであろう。しかし、地球環境破壊に象徴されるように、人間と自然の物質代謝の攪乱、亀裂は地域的であるとともにグローバルな事態である。

そしてまた、20 世紀の大きな経験や出来事はこういった地域コミュニティの世界的なネットワークに現実性をもたせる条件を与えるようになったのではないかと思う。また、モリスは工業化・機械化・分業化のなかで失われていく生活の工芸品を作るようなトータルな労働に関心を寄せたが、今日の日本の〈農〉の現状をみるならば、おそらく有機農業を始めとする環境保全農業ということで語られるこの労働にもモリスは大きな関心を寄せたことであろう。

それで、もし現代においてモリスが自らの構想を補強するということ仮定して20 世紀の非常に大きな出来事や経験を考えてみると、ひとつは、20 世紀前半の二度にわたる世界大戦をへて、原爆投下と国際連合の形成がある。そして、カントの「永遠平和」の理念を背景にして、国際連盟さらには国際連合の形成の際に、「戦争放棄」「戦争非合法化」の機運が米国を始め世界的に高まり、その影響のもとに日本国憲法の第 9 条ができたという経緯がある（河上 2006）。おそらく、原爆の製造と投下に関しては、科学技術が国家主義や産業資本主義が結びついたことによるものだということで、このことは国家主義や機械文明の批判をしていた非暴力主義者モリスにとっては我が意を得たり、という感をもつのではなかろうか。同時にまた、科学技術

が労働の苦痛を減らすことに大きく寄与しうると同時にロボットや人口知能の用い方如何では人間の労働と生活に悲惨な結果をもたらすだろうと深い危惧の念を抱くであろう。

しかし、同時にまた、20 世紀末のインターネットによる情報コミュニケーション技術（ICT）の急激な展開は、モリスを驚かせるのではないだろうか。これは地域コミュニティや人びとの文字通り世界的なネットワークを作り上げることを可能にするからである。そしてまた、20 世紀後半に露呈してきた地球環境問題がエコロジカルな科学技術を通じて食とエネルギーの地産地消の共同体を可能にしているからである。

そしてまた、モリスが『ユートピアだより』を発刊したちょうど 100 年後の 1991 年に、ベラミの『かえりみれば』で描かれたようなソ連型国家社会主義が崩壊し米ソの冷戦が終焉したと聞いても、モリスは驚くことはなかったかもしれない。そして、「私の理想が実現するにはまだ 100 年かかるよ」と言うかもしれない。

最後に現段階では少し思い付き的な見解ではあるが、刺激のために述べるならば、ある意味で、19 世紀末までにイギリスを中心に成熟しつつあった脱近代・脱工業文明への感受性・志向性は、20 世紀における帝国主義的な世界大戦とその後の米ソの冷戦体制のもとで、ほぼ一世紀間封印されたともいえるのではないだろうか。これが 20 世紀にディストピアが多く著された所以ではなかろうか。その意味では、21 世紀は 20 世紀に蓄積された条件と経験を生かして脱近代・脱工業化へ向かう世紀ではなかろうか。その意味では、モリスの『ユートピアだより』のバージョンアップが再度試みられてもよいかもしれない。

〔引用・参考文献〕

・池上惇『生活の芸術化――ラスキン、モリスと現代』丸善、1993 年
・伊藤邦武『経済学の哲学――19 世紀経済思想とラスキン』中公新書、2011
・モリス、ウィリアム『ユートピアだより』岩波文庫、2013
・モリス、ウィリアム&バックス、E・B『社会主義 その成長と帰結』晶文社、2014
・大内秀明『ウィリアム・モリスのマルクス主義』平凡社、2012
・大熊信行『社会思想家としてのラスキンとモリス』論創社、2004
・小野二郎『ウィリアム・モリス　ラディカル・デザインの思想』中公文庫、1992
・河上暁弘『日本国憲法第 9 条成立の思想的淵源の研究――「戦争非合法化」論と日本国憲法の平和主義』専修大学出版局、2006
・川端康雄編『小野二郎　ウィリアム・モリス通信』みすず書房、2012
・小泉龍人『都市の起源――古代先進地域＝西アジアを掘る』講談社、2016
・木原武一『ルイス・マンフォード』鹿島出版会、1984
・クロポトキン『クロポトキン２　アナーキズム叢書』三一書房、1987
・チャヤーノフ、アレクサンドル『農民ユートピア国旅行記』平凡社、2013（1919）
・トムソン、ポール『ウィリアム・モリスの全仕事』岩崎美術社 1994（1967、1977、1991）
・ベラミー、エドワード『かえりみれば――2000 年より 1887 年』『アメリカ古典文庫 7 ―エドワード・ベラミー』所収、研究社、1975
・ベルネリ、マリー・ルイズ『ユートピアの思想史』太平出版社、1972（1950）
・ヘンダーソン、フィリップ『ウィリアム・モリス伝』晶文社、1990（1967）
・安川悦子『イギリス労働運動と社会主義――「社会主義の復活」とその時代の思想史的研究』お茶の水書房、1993
・本間長世「ベラミー『かえりみれば』の現代性」『アメリカ古典文庫 7 ―エドワード・ベラミー』所収、研究社、1975
・マンフォード、ルイス『ユートピアの系譜』新泉社、1971
・――――――『ユートピアの思想史的省察』新評論、1997
・ラスキン、ジョン「この最後の者にも」『この最後の者にも ごまとゆり』中公クラッシクス、2008

【注】

[1] 英国などでは、戦後もニューレフトなどによってソ連型マルクス主義とは異なる種類のマルクス主義として関心がもたれてきた。しかし、日本では、1990 年代の初めに池上惇によってモリス評価がなされたが、それは「生活の芸術化」という視点からで「社会主義者」としてはほとんど評価されなかった。

[2] 1886 年 9 月 13 日付、ローラ・ラファルグ宛の手紙。このエンゲルスの表現は、当時ちょうど、モリスが「社会民主連盟」へマルクスの娘エレノアなどと一緒に参加し、そして続いて 1885 年には「社会主義同盟」を立ち上げ編集長になるとともに、逮捕者の救援活動などで活躍していた状況を考えると、少し酷なレッテルと言えるだろう。

[3] なお、ベラミの『かえりみれば』は、『アメリカ古典文庫―7 エドワード・ベラミー』（訳者：中里明彦）にそれが収められており、本間長世の「解説」も役に立つ。なお、この邦訳では「ベラミー」と使用されているが、小野二郎など多く研究者は「ベラミ」と使用しており、私も基本的に「ベラミ」としたが、この訳者・解説者のように「ベラミー」と使用している論者の場合にはそのまま「ベラミー」としておいた。

[4] 本間は、ベラミは社会主義者と呼ばれることを嫌ったが、「社会主義的ヒューマニズム」の精神をみることができるとし、フロムに関して述べている。「エリッヒ・フロムは、ベラミーのユートピアは、その根本的要素のほとんどすべてにおいて社会主義のユートピアであり、多くの点においてマルク

ス主義的ユートピアであることは、ほとんど疑問の余地がないと述べている」（本間 1985：19）。ただ、大内の視点によれば、ここでのマルクス主義はソ連型マルクス主義のものということになろう。

[5] 最初のユートピアは都市それ自体であったということは、近著の（小泉 2016）が参考になろう。それはまた同時に、貧富の拡大、階級抑圧という最初のディストピアでもあったといえよう。

[6] じつは興味深いのは、この後、ロシアの農業経済学者チャヤーノフが 1919 年にイヴァン・クレムニョフなるペンネームで『農民ユートピア国旅行記』という本を書いているが、これについては後述する。

[7] 池上惇はモリスのこういった「労働の人間化」と芸術的な手仕事との結合の考えに注目して、「生活の芸術化による社会進化」という思想で、当時の日本社会批判を展開した（池上 1993）。

[8] バックスはドイツに留学をして哲学を研究し、マルクスの娘エレノア・マルクスとも親しい関係にあり、マルクスの『資本論』などの仕事をイギリスで最初に本格的に紹介した人物である。

[9] この本の抄訳はあるが、全体の翻訳がなされたのは、じつは不思議なことに、大内秀明監修、川端康雄監訳『社会主義 その成長と帰結』晶文社、2014 年が初めてのことで、その理由について大内が「解題」のなかでふれているので、参照されたい。

[10] ちなみに『この最後の者にも』の雑誌での初出は 1860 年で、単行本の発刊は 1862 年、そして、『資本論』第一巻は 1865 年に発刊されている。また、モリスが読んだ「フランス語版」の発刊は 1872 年－1875 年である。

[11] 『農民ユートピア国旅行記』の訳者解説を参照して、チャヤーノフについて少し述べておくと、彼は、1888 年にモスクワに生まれ、ロシア革命前後において著名な農業経済学者として小農を重視して協同組合組織化に尽力したが、1920 年代末スターリンの「上からの革命」の一環として農業の全面的集団化が強力に進められるなかでチャヤーノフは従来の態度を一変させ、大規模な国営農場建設に賛成することになる。しかし、結局 1930 年にクラーク（富農）の立場から資本主義の復活を策していたとされて逮捕され、中央アジアに流刑され、そこで 1939 年に死んだとされている。

[12] 伊藤はまた、ガンジーが『自伝』において、ラスキンの『この最後の者にも』に魅了され「私の生活を変えよう」としたと書いていることにふれ、その持つ意義を論じている。この点も私が拙著でガンジーを共生の思想家・実践家としたが、この点でもモリスの師であるラスキンに出会うことになることで興味深い。